

性解放理論の批判と純潔の理念

日本統一思想研究院 大谷明史

I. 人間に与えられた神の言

人間社会における倫理、道徳の起源は神から人間に与えられた戒めの言です。

一、 人間始祖に与えられた神の言

(一) キリスト教の失楽園物語

エデンの園の中央に生命の木と善悪知る木があった。神はアダムとエバに善悪知る木の実を食べたら死ぬと警告された。へびがエバにささやいた。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪知る者となることを神は知っておられるのです」。エバはその実を食べ、アダムにも食べさせた。それを知った神は、彼らをエデンの園から追い出された。

統一原理によれば、善悪を知る木の実は、文字どりの木の実ではなく、エバの性を意味していたのであり、善悪を知る木の実を食べてはならないということは、アダムとエバが成長して、神の祝福による結婚をするまでは、性的な交わりを行ってはならないという神の戒めでありました。蛇も文字どりの動物の蛇ではなく、エバを誘惑した天使長であり、神の言に叛いて、アダムとエバを墮落させてサタン(悪魔)となった存在です。

神が祝福して結婚をするまでは、純潔を守らなくてはならないというのが、神が人間に与えた戒めの言でありました。

(二) イスラム教の失楽園物語

『コーラン』には、次のように書かれています。

「アダムよ、おまえと妻とはこの楽園に住み、ほしだけ食べよ。しかし、けっしてこの木に近づいてはいけない。さもないと、おまえたちは不義を犯すことになる」ところがサタンは二人にささやいて……言った、「主がおまえたちにこの木を禁じたのは、おまえたちが天使になり、あるいは不死身となるのを恐れたからにほかならない」
こうして、彼は二人を惑わしてしまった。二人がその木を味わったとき、その隠し所はあらわになったので、楽園の木の実でおおい始めた。主は彼らに呼びかけたもうた、「わしはおまえたちにあの木を禁じ、『サタンはおまえたちの公然の敵だ』と言っておいたではないか」(『コーラン』 7:19-2)

以上、『コーラン』に書かれていることも、ユダヤ・キリスト教の「失楽園」の物語と同じであることがわかります。

(三) ギリシア神話

プロメテウス (Prometheus) が天界の火を盗んで人間に与えたことに激怒したゼウス (Zeus) は、「火の償いとして、人間どもに災いを与えよう」と言って、鍛冶神ヘパイストス (Hephaestus) に命じて、粘土から女神に似せた美しい女を創らせました。ゼウスはその女に、「神々の贈り物である女」という意味のパンドラ (Pandora) という名を与えました。こうして最初の女パンドラは罰として人間に与えられたのでした。

パンドラは神々の贈り物をつめこんだ甕 (箱) を持っていました。それを開けることは、神々から固く禁じられていましたが、パンドラは好奇心にかられて開けてしまいました。

するとそこから、病気、苦痛などあらゆる災いが飛び出して、人間の中に蔓延することになりました。人間の最初の女であるパンドラが、禁じられた甕を開けたことが災いの元になったというのです。

パンドラの甕とは、文字通りの甕ではなくて、善悪知る木の実であるパンドラの性を意味しているのです。すなわち、甕を開けてはならないというのは、神（ゼウス）が祝福するまでは、純潔を守りなさいという意味でした。

(四) 仏教

今日まで、仏教においては、魔王が天上界（霊界）の霊的な存在か、それとも人間生命の内なる心の働きを擬人的に比喻したものかという問題が論じられてきました。

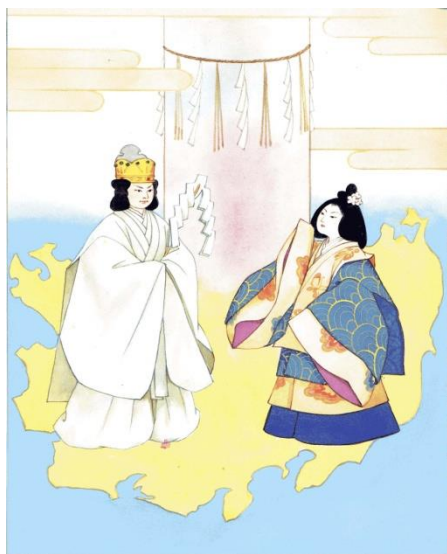
釈尊は、菩提樹の下で魔王と闘い、これを退けて降魔成道（成仏）されました。魔王は、命を奪い、功德を奪い、破壊し善を妨げ、讒言するものです。魔王を天子魔（てんじま）と呼ぶように、天界の霊的存在であると言えます。（竹内清治『慈愛の先祖供養』賢人社、134-5頁）

『法華経』には「久遠本仏」と人間の関係を父子の因縁で説く比喻が多くしめされています（65頁）。中国の天台大師知顛（てんだいだいし、ちぎ・中国天台宗の開祖）によれば、人間は本来、「久遠本仏」の本眷属（一族）であるとされています。

ところが日蓮は「一切衆生は、無始以来、かの魔王の眷属なり」と、人間と悪魔の血縁関係を説いています（日蓮書簡の『兄弟抄』）。では、なぜ人類は魔王の眷属になったのでしょうか？ それに関して、仏教では明らかにされていません。（竹内清治『慈愛の先祖供養』賢人社、137-8頁）

(五) 日本の神話

イザナギ(男の神)とイザナミ(女の神)が天の御柱を回って夫婦の交わりをしました。そのとき、イザナミが先に唱えて(先導して)交わったところ、不具の子が生まれたので、その行為が間違っていたことを悟り、やり直して、今度はイザナギが先に唱えて(先導して)交わったところ正常な子が生まれたとあります。この物語も人類の最初の女性に過ちがあったことを示唆しています。



その後、イザナミは火の神を生んだことから陰部が焼けて死んで、黄泉の国へ旅立ちました。イザナギが妻の後を追って黄泉の国へ行き、妻を待ちくたびれて、入ってはいけな

いと言われた御殿の中に入っていくと、全身にうじが湧き、八体の雷神のとりついた妻の姿がありました。イザナギは逃げて、九州のあわぎ原で「みそぎはらえ」をおこないました。イザナミは陰部が焼けて死んで、黄泉の国（地獄）へ旅立ったといいますが、これはイザナミ、すなわち女性の始祖に、性的な問題があったことを示唆しています。

二. 聖人を通じて与えられた神の言

キリスト教を始め、伝統的宗教は、離婚してはいけない、同性愛はいけないと戒めています。以下、代表的な宗教の規範を示します。

(一) モーセの十戒

シナイ山で、神がモーセにくださった十戒は次のようです。

- 第一戒：あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない
- 第二戒：あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない
- 第三戒：あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない
- 第四戒：安息日を憶えて、これを聖とせよ
- 第五戒：あなたの父と母を敬え
- 第六戒：あなたは殺してはならない
- 第七戒：あなたは姦淫してはならない
- 第八戒：あなたは盗んではならない
- 第九戒：あなたは隣人について偽証してはならない
- 第十戒：あなたは隣人の家をむさぼってはならない

姦淫、同性愛は特に厳しく戒められています。レビ記には次のように書かれています。

主はまたモーセに言われた、……

人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者があれば、その姦夫、姦婦は共に必ず殺されなければならない。……女と寝るように男と寝る者は、ふたりとも憎むべき事をしたので、必ず殺されなければならない。その血は彼らに帰するであろう。(レビ記 20/10-16)

(二) キリスト教

旧約時代は律法の厳しい時代でしたが、慈愛、寛容を強調する新約時代のキリスト教においても、不倫、同性愛を厳しく諫めています。

離婚してはならない

イエスは答えて言われた、「あなたがたはまだ読んだことがないのか。『創造者は初めから人を男と女とに造られ、そして言われた、それゆえに、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである』。彼らはもはや、ふたりではなく一体である。だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」(マタイ 19:4~6)

更に、結婚している者たちに命じる。命じるのは、わたしではなく主であるが、妻は夫から別れてはいけない。……また夫も妻と離婚してはならない。(コリント I 7:10~11)

不倫をしてはいけない

「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え」(マタイ 19:18)

同性愛をしてはいけない

不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。(コリント I 6:9~10)

(三) イスラム教

『コーラン』には次のような一節があります。

「盗みをしません。姦通しません。子女を殺しません。勝手にねつ造したうそを言いません。正しいことで、あなたに背きません」(「試される女の章」12節)。

『コーラン』に基づいたイスラム法は旧約聖書の律法のように、姦通、および同性愛は厳罰に処せられます。

(四) 仏教

仏教には五戒があります。

1. 生き物を殺さない
2. 盗まない。(不偷盜)
3. 嘘をつかない。(不妄語)
4. 不倫をしない。(不邪淫)
5. 飲酒をしない。(不飲酒)

(五) 儒教

儒教には「自然界から学び、真理を得て、誠実に考え、心を正し、人格を養い、家庭を正しく築き、国を正しく治め、平和で幸せな世界を築く」という八正道の教えがあります。そして、家庭を正しく築くために、「貞操を守りなさい」という教えがあります。

II. 神の言を否定する思想 vs 統一思想

今日、世界的に、倫理・道徳が大きく揺らいでいます。中でも性道徳の崩壊は目を覆うばかりです。その結果、家庭の崩壊、各種の犯罪の蔓延が深刻な問題となっています。

倫理・道徳の崩壊の背景にあるのは、伝統的な宗教的価値観の崩壊であり、それをもたらしたのは、神を否定する唯物思想です。特に 19 世紀に生まれた強力な唯物論・無神論、すなわち神の存在を根底から否定するマルクス主義、神の創造を否定するダーウィニズム、そして神の言(戒め)を否定するフロイト主義が猛威をふるっているのです。

キリスト教道徳は、人間を奴隷のように貶める奴隷道徳であると言って、神の言に反旗を翻したのはニーチェですが、性に関するキリスト教の規範に反旗を翻したのはフロイトです。ここでは本論のテーマに沿って、フロイトから取り上げることにします。

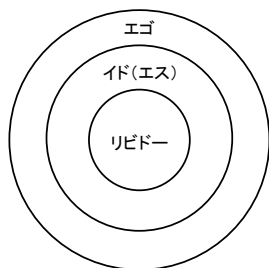
一. フロイト主義

(一) 心の分析

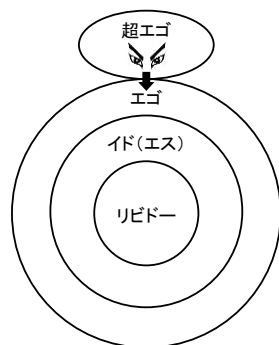
① フロイトの分析

フロイトによれば、人間の心は本来イド (*id*, エス Es とも言う) である。イドは無秩序で混沌としており、規律を無視して、ひたすら快感を求める。イドのみの人間は動物的な存在である。イド(エス)の中からエゴ(ego, 自我)が生じる。エゴはイドの周辺にある文明化された心である。さらに人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドー(libido, 性的エネルギー)であり、イド(エス)はリビドーの貯蔵庫である。つまり、イド(エス)

の中からリビドーが泉のように湧き出るということであり、アンソニー・ストー(Anthony Storr)が言うように、「性欲こそ人間のもっとも重要な駆動力なのである」(『フロイト』124頁)。フロイトの分析した心の構造を図示すれば次のようになります。



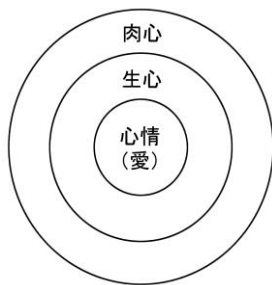
フロイトはさらに、超エゴ (super-ego, 超自我) が外部から人間の心を支配していると言います。超エゴは「こうあるべき」、「～してはいけない」といって、エゴを監視しているのです。フロイトのいう超エゴとは、幼児期に経験した父母 (特に父親) からの叱責や、キリスト教封建道徳によるものです。



② 統一思想から見た人間の心

人間の心は霊人体を基盤とした生心と、肉身を基盤とした肉心との統一体です。生心は真善美と愛を追求する心であり、肉心は衣食住と性的欲求を追求する心です。生心と肉心は本来、主体と対象の関係にあり、肉心は生心に従わなくてはならないのですが、墮落した人間においては、肉心が主体になり、生心は肉心に引きずられている場合が多いのです。

人間の心を根底から動かしているのは心情、すなわち愛したい、愛されたいという愛の衝動です。心情は心の最も深いところにあります。真の愛の心情を中心とすると、肉心は生心に自然に従うようになり、生心と肉心は共鳴します。そのような心の本心と言います。統一思想から見た人間の心の構造を図示すれば次のようになります。



③ 統一思想から見たフロイトの「心の構造」への批判

フロイトは、人間の心の中でエゴ（自我）とイド（エス）が闘っていると見ましたが、統一思想の観点からいえば、フロイトは生心と肉心の関係を捉えたといえます。しかしながら、そこには次のような問題点があります。

動物的、本能的な心であるイド（エス）から、いかにしてエゴ（自我）が生じるのでしょうか？ 動物にはなぜエゴ（自我）が生じないのでしょうか？ また、イド（エス）は悪しき衝動であって、エゴでもってイドを抑圧すべきであると言いますが、それではいつまでも、イドは悪しき衝動のままであり、人間は本性的に野蛮な動物的存在ということになります。

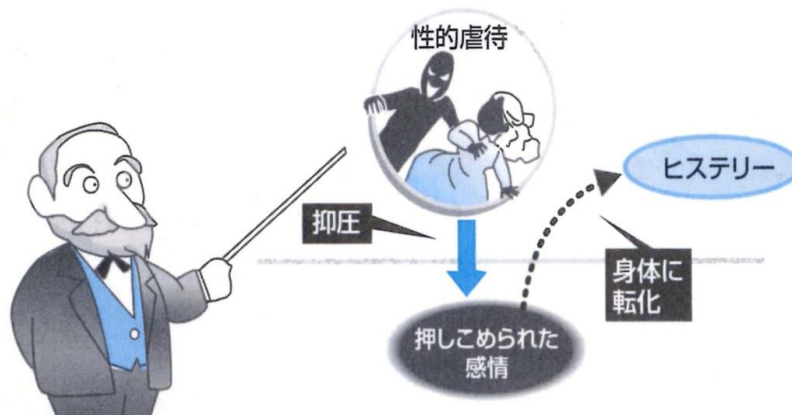
(二) 初期フロイト

フロイト当時、ヒステリーという不思議な病気がありました。「ヒステリーとは、簡単にいうと、器官に異常がないのに、眼が見えない、耳が聞こえない、口がきけない、視野狭窄が起きる、立てない、歩けない、体の一部が麻痺する、感覚がなくなる、といった症候を示す病的状態のことです」（鈴木晶『フロイト以後』）。フロイトはこの病気の原因を、心の中の「抑圧」された感情が、後に身体に転化したものであると考えました。

フロイトによれば、人間の心を根底から動かしているのは性的な衝動（リビドー）であるが、幼児期の性的虐待や結婚生活における性的フラストレーションなどによって、心の奥深くに傷が生じている。しかし性を罪悪視するキリスト教道徳の下で、患者はその心の傷を忘れようとして、その記憶を意識の外（無意識）に追い出してしまふ。それがフロイトのいう「抑圧」(repression)です。

① 性的外傷説 (Theory of Sexual Trauma)

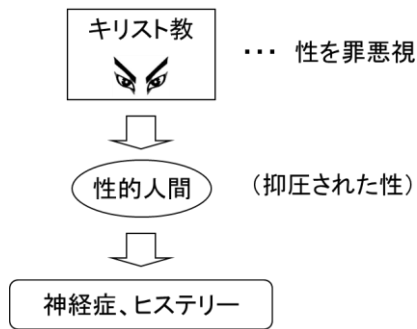
フロイトは初め「幼児期における性的虐待が神経症の原因である」と考えていました。



小谷野博 『図解雑学・精神分析』 p. 135

キリスト教道徳が超エゴとなってエゴを支配し、抑圧的になったエゴがイド（エス）を強圧的に支配する。その結果、抑圧された人間が神経症やヒステリーになっていると見ました。そこでフロイトは、患者の心の深層を探り、抑圧の事実を明らかにして、患者の心を解放することによって、患者は治癒されると考えました。

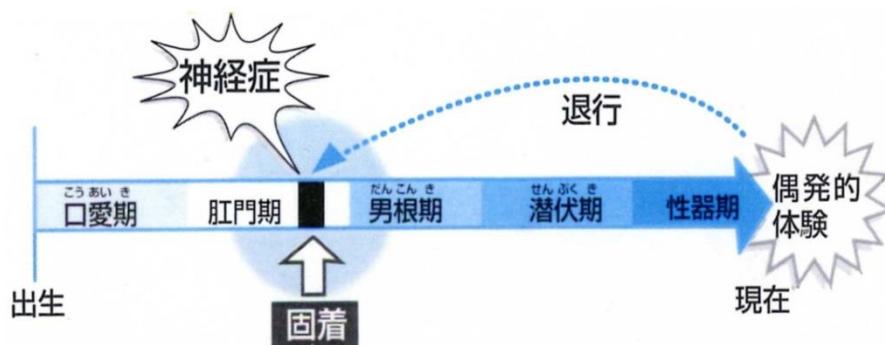
当時のキリスト教は、性を悪なるものであると断罪していました。そのような封建的道徳に対してフロイトは反旗を翻したのです。



② 心的外傷説 (Theory of Psychic Trauma)

ところが患者の幼児期の性的虐待は、必ずしもすべての患者に当てはまるものではありませんでした。その後、フロイトは性的エネルギーであるリビドーの意味を、生理的欲求というように拡大しました。けれどもリビドーの根底にあるのはあくまで性的な衝動であって、幼児にも性欲があり、それは年代とともに変化していくと考えました。それが幼児性欲説です。

やがてフロイトは初期の性的外傷説に代えて、神経症とは、幼児期の心的外傷（トラウマ・心の傷）によってもたらされた、リビドーの固着点へ「無意識」に退行して起きる現象であるという、心的外傷説に基づく神経症理論を唱えました。



小谷野博 『図解雑学・精神分析』 p. 137

リビドーの発達段階のどこかで、リビドーが満たされなかったり、拒絶されたりして、リビドーの発達のどこかに固着 (fixation) があつた場合、それが後の偶発的体験が契機となって、固着点に退行するとき、それが神経症として現れるというのです。つまり幼児期における心の傷——心的外傷 (トラウマ) ——と後の偶発的な外傷的体験とが、互いにそろった時、神経症という目に見える形になって現れるのだというのです。

フロイトによれば、人間の幼児期から現在に至るまでに生じたリビドーの傷 (固着) が神経症の原因です。しかし統一思想から見れば、人間を根底から動かしているのは性的エ

エネルギーではなく、心情——愛したい、愛されたいという衝動——です。したがって、人間の心の傷となって神経症を引きおこしている本質的なものは、幼児期の心的外傷によるリビドーの固着ではなく、心情の傷であり、愛の傷です。心的外傷によるリビドーの傷も、傷の一部をなしているとしても、それがすべてではないのです。より根本的には愛の傷です。すなわち父母、兄弟姉妹、友達などの周囲の人たちから冷たくされたり、虐待されたり、あるいは彼らの期待に答えられなくて挫折したことなどによる愛の傷が原因なのです。

さらに心理的な問題は、幼児期の体験のみならず、霊界の先祖たちまで、さかのぼります。すなわち、われわれの心の傷は、幼児期の心の傷のみならず、先祖たちの心の傷（悲しみ、怨み、憎しみなど）も加わっているのです。したがって心の病気の解決は、個人の幼児期からの精神的な治療だけでは不十分であり、霊界までさかのぼって、先祖たちの心の傷を解決することまで、なされなくてはならないのです。先祖たちの心の傷には、他人から受けた傷と他人に与えた傷があります。他人に与えた傷は、傷を受けた人（霊人）の怨念が傷を与えた人の子孫にふりかかってくるのです。したがって、そこに先祖供養や先祖解怨の意義があります。

神経症に対するフロイトと統一思想 の見解

- フロイト
幼児期の **リビドーの傷** → 神経症
- 統一思想
先祖から私に至るまでの **心情(愛)の傷**
→ 神経症、苦悩、不安

(三) 後期フロイト

フロイトの弟子の中から、人間は本来、性的存在であり、性を抑圧するから神経症になるのであって、性を解放することによって、人間は本来の姿に戻るという、フロイト左派の性解放理論が生まれてきました。

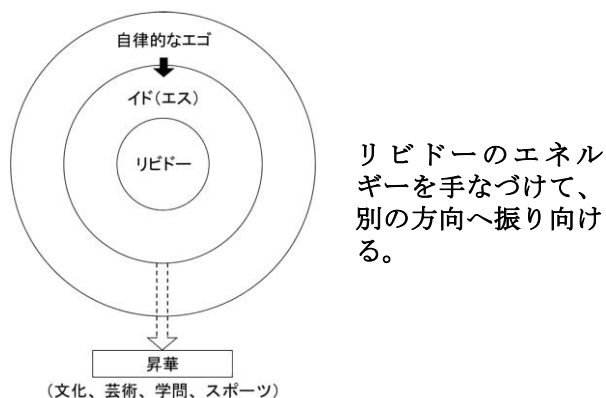
しかし、イド（リビドー）を解放した人間は野生の動物的存在でしかありえません。野生の動物は勝手に異性と関係をもち、性のために闘い、殺しあったりします。フロイトは人間がそのような野蛮な状態になることを恐れたのです。そこでフロイトは、イドからエゴ（自我）が生まれてくるとして、人間は自らエゴによってイドをコントロールすべきであると主張しました。

イドは盲目的な、動物的要求が宿っている所であり、人間精神の原始的な場所であり、暗いジャングルである。エゴはジャングルの周辺にある文明化された所、ジャングルの開拓地である。フロイトは次のように言います。

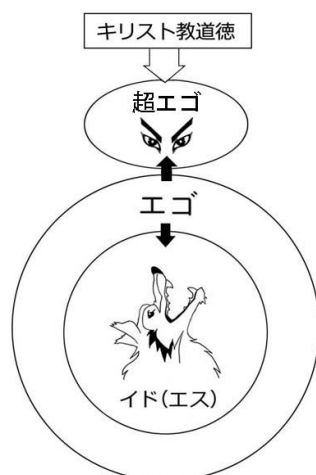
- われわれ、すべての人間のなかに野蛮人（イド）がいる。
- 自分の中に荒れ狂っている強い衝動（イド）を操る力（エゴ）を発展させねばならない。
- エゴによってイドを抑圧せよ。

フロイトはイドとエゴの関係を暴れ馬と騎手の関係にたとえています。熟練した騎手によって、暴れ馬をよく操れば、馬は素直に騎手に従うようになるというのです。（イドは心の中のオオカミということもできます。オオカミが暴れないように抑えなさいということです。）

フロイトは「昇華」(sublimation)についても語っています。リビドーの宿るイドの衝動のままに生きる人間は野獣と変わりありません。そこでフロイトはイドの野蛮な力を昇華させなくてはならないと主張しました。昇華とは、リビドーのエネルギーを必要な現実適応に向けさせることであり、イドの野蛮な力を新しい目的に転じてゆくことです。つまり、昇華とは、本能的欲求を、政治、芸術、音楽、スポーツなどの直接的満足以外の目的に向け換える過程をいうのです。しかし、それは根本的な解決策ではありませんでした。政治家、芸術家、音楽家、スポーツ選手になれば、性的衝動をコントロールできるかと言えば、かならずしもそうでなく、彼らの中で不倫やセクハラが頻繁に起きている現実があります。



人間を抑圧しているキリスト教道徳を否定せよ。他方、人間の中の野蛮な心であるイド(エス)を自律的、合理的なエゴで抑圧しなくてはならない。すなわち、「イド(エス、悪しき衝動)と超エゴ(封建道徳)に対して、ともに闘う」というのがフロイトの結論でありました。



フロイトは、封建主義的、専制的なキリスト教道徳による性の抑圧(タブーと偏見)から人間を解放せよと言って、絶対的な神の言(戒め)を否定しました。そして自律的、合理的なエゴを確立せよと言いましたが、いわば「性の民主主義」を主張したのです。

(五) フロイト左派の性解放理論

人間は本来、性的な存在であるというフロイトの立場から、性を抑圧するから人間は神

経症になるのであり、性を解放することによって、人間は本来の姿に戻るというフロイト左派が生まれました。野生の動物を檻に入れたり、鎖につながり、異常をきたすのであって、「野生の動物は野生のままに！」というのです。その代表的人物がライヒ、マルクーゼです。

① ライヒの性欲理論

ライヒは、性的な満足（オルガスム）を得ることによって、神経症は治ると主張します。彼は次のように言います。

- 人間の感情や思考の構造を支配しているのは性のエネルギーである。
- 快楽はわるいことではない、いいことだとみとめ、性について罪悪感を持たないことだ。
- 性の幸福をまったく、実際に、肯定する。

② マルクーゼのエロス文明

マルクーゼは、文化のエネルギーは性欲から来るとして、非抑圧文明であるエロス文明の到来を宣言しました。そして「われわれは、もう一度知恵の木の実を食べなければならない」、「原罪」はふたたびおかせねばならない」と言います。

③フロイトへの批判

1. フロイト左派が生まれた

人間を本来、性的な存在と見ることから、自然の成り行きとして、「性の解放」（フリーセックス）を主張するフロイト左派が生まれました。

2. 「性の自己決定論」に道を開く

フロイトは絶対的、普遍的な規範——神の戒め、ロゴス、天道など——を否定することにより、性行動の決定は個人の意思にまかせるべきであるという「性の自己決定（self-determination）」の主張に道を開いたのです。

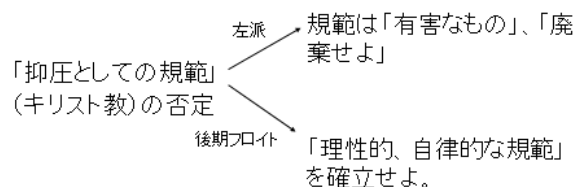
（五）神の言（戒め）の否定

フロイトの宗教観は次のようです。

- 宗教は「原父殺害」に由来する「父コンプレックス」の土台の上に成立したものである。
- 宗教は個人の幼児期体験が外界に投影された集合的神経症（collective neurosis）である。
- 宗教は集団幻想であり、空想の産物にすぎない。

したがって、キリスト教道徳は絶対的な父権を中心とした権威体制の反映であり、強迫観念的な規範である。すなわち、一種の権威的、抑圧的な「掟」であり、「タブー」にすぎない。かくしてフロイトは神の言（戒め）に基づくキリスト教道徳を「抑圧としての規範」として否定したのです。

一方、フロイト左派は、人間は性的に抑圧されることによって、本来の姿を失っていると見ました。したがって、性を抑圧する規範は人間を貶めるものです。すなわち、神の言（戒め）は、「有害なもの、廃棄すべきもの」です。それは正に倫理・道徳の破壊の理論でありました。



二. マルクス主義

マルクス主義は徹底的な唯物論であって、神の存在を否定し、神の言を信じません。それは次のようなレーニンの言葉に明らかに示されています。

ブルジョアジーは、この倫理を神の掟から引きだしている。……われわれは神を信じない。そして、聖職者、地主、ブルジョアジーが、神の名でかたってきたのは、自分たちの搾取者としての利益を実現するためであったことを、よく知っている……このような超人間的・超階級的な概念から引きだされた倫理を、われわれはすべて否定する。これは欺瞞である、それはぺてんである、地主と資本家の利益のために、労働者と農民をたぶらかすものである。(『レーニン全集』第31巻、大月書店、288頁)

マルクス主義には、純潔や一夫一婦制の理論的根拠はありません。理論的には性解放であって、結局は性解放へと向かわざるをえないのです。マルクスは『共産党宣言』の中で次のように言います。

家族の廃止！もっとも急進的な人々さえ、共産主義者のこの恥ずべき意図に対しては、激怒する。……共産主義者のいわゆる公認の婦人共有におどろきさわぐ、我がブルジョアの道徳家振りほど笑うべきものはまたとない。……共産主義者は偽善的に内密にした婦人の共有の代りに、公認の、公然たる婦人の共有をとり入れようとする、とでもいったらよかろう。

これはブルジョア的な関係から生じる「偽善的な婦人の共有」は消滅し、共産主義的な公然たる「婦人の共有」になるということ、すなわち一夫一婦制の廃止とフリーセックスを公然と宣言するような発言です。

マルクス主義では、家庭は階級支配の原点であると見ています。つまり、夫はブルジョア、妻はプロレタリアであり、夫が妻を支配し、搾取しているというのです。エンゲルスは言います。

今日では、すくなくとも有産階級においては、夫は大多数のばあいに稼ぎ手、家族の扶養者でなければならず、そしてこのことが夫に支配者の地位をあたえるのであって、なにも法律上の特別優先権を必要としない。家族のなかでは夫がブルジョアであり、妻がプロレタリアを代表する。(『家族・私有財産・国家の起源』)

結局、マルクス主義は家庭を否定します。その結果は、愛の秩序も性の秩序もなくなり、

性解放の社会にならざるをえないのです。文師は、次のように語っています。

共産主義は神がないと否定しています。また、宗教をアヘンだといい、宗教を中心とした家庭を否定しています。これはサタンが宗教と宗教を中心とした家庭を通して、自分を屈服させようとなさる神様のみ旨を知って、共産主義を通して宗教と家庭を否定しているのです。(『南北統一』132-33)

エンゲルスの夫婦観は次のようです。

[夫婦における]個人的性愛の発作の持続期間は、個々人によって非常に相違する。とくに男のばあいはそうである。そして、愛着がまったくなくなるか、あるいは新しい情熱的な恋愛によって駆逐されたばあいには、離婚は当事者の双方にとっても社会にとっても善行である。」(『家族、私有財産および国家の起源』国民文庫, 105-6 頁)

男女の愛を性愛の関係のみで捉え、個人的性愛の「発作の持続期間」が個々人によって相違があるから、愛着がなくなれば、さっさと離婚したほうがよいというわけです。このようなエンゲルスの共産主義的家族論は、まさに家庭崩壊を助長するものであり、フリーセックス社会を導くものです。毛沢東も、共産主義下では家庭は崩壊すると言いました。

「毛主席は無政府、無国家、無家庭の三無を語ったが、これは将来すべて実行されるだろう。毛主席は、家庭は消滅しなければならない、と二回話した」(1958年6月14日、劉少奇)。

「公共食堂」なるものをつくり、家庭での食事を否定、生産のみならず、消費・生活にいたるまで「公有化」をめざしたこの実験は「大躍進」と呼ばれた。(揚継縄『毛沢東：大躍進秘録』文藝春秋)

家庭は愛の基盤であり、愛は神に由来するものです。したがって家庭を認めれば、結局、神を迎えるようになります。したがってサタンが役事する共産党は、家庭をなくして、家族をみなばらばらにして、人民公社のようなところで共同の生活をさせて、共同で生産活動にいそしむように導きます。けれども、そこには人民の代表と称する共産党がいて、人民を支配します。そして、神を否定する共産党ですから、その背後からサタンが働き、サタンが人民を支配するようになるのです。

三. ダーウィニズム

進化論の観点から見た自然界は、冷酷であって、生物の進化法則(適者生存)は非道徳的です。したがって、進化論において、規範の根拠は不明です。適者生存の世界においては、人間社会においても、競争的、闘争的なフリーセックス社会にならざるをえません。

ダーウィンの進化論を強力に擁護して「ダーウィンのブルドック」と呼ばれたハクスリー(Thomas Henry Huxley)は、道徳や倫理は進化によって説明されるものではないということ認めました。そして彼は、道徳や倫理は進化とは別の原理によって説明されなくてはならないと言いましたが、その起源を明らかにすることはできませんでした。

四. フランクフルト学派

マルクス主義とフロイト主義を合体させたのが、ホルクハイマー(M. Horkheimer)、アドルノ(W. Adorno)、マルクーゼ(H. Marcuse)、ベンヤミン(W. Benjamin)、フロム(E. Fromm)、ハバーマス(J. Habermas)等のフランクフルト学派です。この思想が今日の文化

共産主義の源流となっています。

20世紀にナチスによる悲惨なユダヤ人大量殺戮がおきましたが、「なぜ人類は真に人間的な状態に歩みゆく代わりに、一種の新しい野蛮状態に落ち込んでゆくのか」というところからこの学派は出発しています。ホメロスの『オデュッセイア』(Homer's Odyssey) — トロイ戦争 (Trojan War) で活躍し、故郷に帰る航海でセイレーン (Sirens) の魔術的な歌声などの誘惑に打ち勝ったオデュッセウス (Odysseus) が、やがて残虐な復讐の暴君になる物語——を題材にしながら、理性の道具化、理性の腐食を告発します。そしてホルクハイマーは今日の産業文明における進歩的・技術的合理化によって理性が道具化したと見て、理性を批判し、告発し、否定することこそ、今日の理性の最大の職務であると主張します。

彼らはやがてマルクス主義だけでは説明のつかない状況の展開は、伝統、家族関係、性などの無意識的深層心理が介入して人間の性格なり行動様式が決定されてくるという点に、注目せざるを得なくなりました。そこで彼らの中で、ファシズムを支える基盤となる人間の「権威主義的性格」の解明が大きなテーマとなり、フロイトに準じて、それは性の快楽を禁止する家父長制社会の道徳から由来すると考えました。

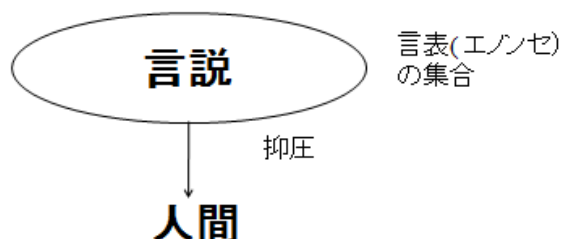
後にフランクフルト学派から離脱したエーリッヒ・フロムが、マルクスとフロイトの思想統合を成し遂げてゆくうえで、きわめて重要な役割を果たしました。

フランクフルト学派は、西ドイツの反戦・反政府の学生運動に理論的根拠を与えましたが、彼ら (ホルクハイマー、アドルノ) はかえって急進的な学生たちから、行動が伴わないと批判される結果になりました。またマルクーゼは、性の抑圧のないエロス文明の到来を説いて、アメリカのヒッピー族、反戦運動の青年たちの教祖として崇められました。しかし彼は「現代アメリカ社会の、性の氾濫の擁護者」と見られるのを警戒して、性の氾濫は自分の真意ではないと、責任ののがれの発言をしています(ポール・ロビンソン『フロイト左派』)。

フランクフルト学派は、道具化した理性を批判していますが、それは自らの理性を正義であるとして、理性によって理性を批判するということであり、根拠が疑わしいものです。統一思想から見れば、理性の背後に善なる欲望、または悪なる欲望があります。善なる欲望は真の愛に起因するものであり、悪なる欲望は偽りの愛に起因するものです。したがって理性の次元で理性を批判しても、事態の解決にはなりません。

五. ポスト構造主義

フロイト主義は神の言(戒め)が人間を抑圧していると主張しますが、ポスト構造主義は、神の言のみならず、人間が通常使用している言(言説)も人間を抑圧していると言います。そして言語構造が人間と世界を決定しているが、その構造は差異、暴力、ノイズなどによって時代とともに変わると見えています。言説(discours, ディスクール)とは、ある言明や信念を言いますが、それは言表(énoncé, エノンセ)の集合からなるものです。

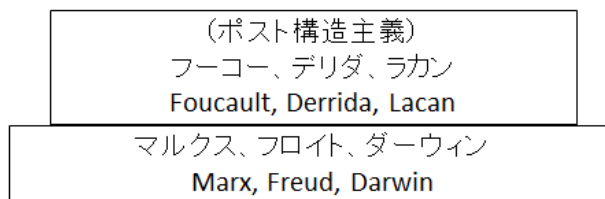


ポスト構造主義は、言語構造の中にマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の作用を見えています。

- 言語構造の中に権力が潜んでいる。(マルクス主義より、フーコー Foucault)
- 原語構造はゆらぎ、ノイズなどによって時代とともに変わる。(ダーウィニズムより、デリダ Derrida)
- 言語構造の中にキリスト教封建道徳が作用しており、人間を抑圧している。(フロイト主義より、ラカン Lacan)



結局、ポスト構造主義の土台は、マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義なのです。



統一思想から見れば、言説は本来、人間を抑圧するものでなく、真の愛へと導く愛の道標です。しかし、墮落した人間の言葉には、神とサタンが作用しています。サタンの言葉と神の言葉を分別して、神の言から来ている規範（倫理・道徳）に従うべきなのです。



六. ポストモダン・フェミニズム

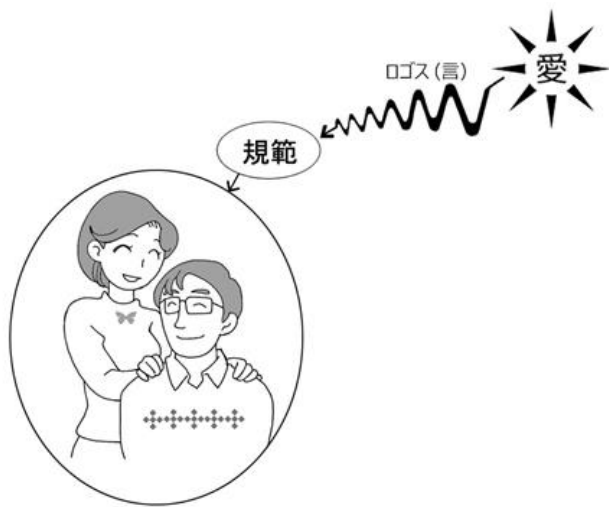
ポストモダン・フェミニズムは、さらに言（言説）が女性を抑圧していると主張しています。すなわち、言（言説）が家父長的、男根中心的になっていて、女性を抑圧するものとなっていると言います。そして、女性中心の言語を造り、女性の快樂（ジュイサンス、*jouissance*）を目指すと主張します。



ポストモダン・フェミニズムは、これまで言語をもたなかったもの——家父長制文化によって抑圧されてきた女性性——を書き記すと言い、女性中心の言語、「エクリチュール・フェミニン」(*écriture féminine*)を唱えます。

このようなポストモダン・フェミニズムに対する統一思想の見解は次のようです。

- 女性性中心の言語と文化を築くのではなくて、男女が調和した言語と文化が築かれるべきである。
- 女性だけで女性特有の快樂は得られない。男女の真の愛において、女性の快樂も男性の快樂も得られるのである。
- 神の言は、男女が共に愛しあい、共に喜ぶ、真の夫婦の愛へと導くものである。



七. クィア理論

クィア理論 (Queer Theory) は、ジェンダー (性) は言 (言説) によって造られたものであるから、ジェンダーを攪乱せよと叫びます。バトラー (Judith Butler) とセジウィック (Eve K. Sedgwick) がその代表ですが、彼女たちの主張は次のようです。

- 性に関するあらゆる枠組みに疑問を投げかける。
- あらゆる形態の性の「規範」化に反対する。

八. 日本の性解放理論

日本の性解放理論には次のようなものがあります。

- ① ジェンダー・フリー思想
- ② 性の自己決定論
- ③ (ネオ) マルクス主義フェミニズム
- ④ 純潔教育の否定

(一) ジェンダー・フリー思想

日本ではジェンダー・フリー思想が登場し、ジェンダーからの解放、すなわちジェンダーの解消を叫ぶようになりました。

フェミニズム研究者の山口智美によれば、1994年に「男女共同参画」という言葉が登場し、95年には「ジェンダー・フリー」という言葉が登場し、95年は女性運動が、行政と学者主導の運動に転換した重要な時期だったと言います。(『バックラッシュ』244, 279頁)

東大教授の大沢真理は、「男女共同参画」は gender equality をも越えて、ジェンダーそのものの解消、「ジェンダーからの解放」(ジェンダー・フリー) を志向することであると云います。(『バックラッシュ』260頁)

「ジェンダー」とは、社会的、文化的に形成された性であって、生来的なものではないとして、ジェンダー・フリー思想は「男らしさ」「女らしさ」をなくそうとします。また「同性愛 (ゲイ、レズ)」と「異性愛 (男女の愛)」の差別をなくすことを主張します。その結果、同性愛、バイセクシャル、トランスジェンダーなどを奨励するようになります。

(二) 性の自己決定論

首都大学教授の社会学者、宮台真司は1992年ごろから、援助交際を素材として「性の自己決定論」を展開しました。性行為は、倫理・道徳によって規制すべきものではなくて、

各自の意思によって決定すべきものであると主張します。そして彼は「売買春一般や、青少年の性行為一般を“いけない”と断定しないこと」と言います。(『性の自己決定原論』261頁。)

(三) (ネオ) マルクス主義フェミニズム

元東大教授の上野千鶴子は、自身の主張する、(ネオ) マルクス主義フェミニズムについて、「マルクス主義に対する批判を通過したフェミニズム」とであると、次のように言います。

マルクス主義フェミニズムは、階級支配一元説[マルクス主義]も性支配一元説[フェミニズム]もとらない。両者は相互に排他的な、二者択一なものではない。……(ネオ) マルクス主義フェミニズムは、だから、(オールド) 社会主義婦人解放論と、それに対するアンチテーゼであったラディカル・フェミニズムとの間の、統合もしくは止揚として登場した。(『家父長制と資本制』12-13頁)

上野は、「家事労働」という不払い労働こそが、階級形成のための物質的基盤であるとみて、「共産党宣言」をもじって「万国の家事労働者よ、団結せよ」と叫んでいます(『家父長制と資本制』84頁)。男の支配から逃れようというのです。さらに、男に認められることが女の価値ではなくて、「私の価値は私が決める」と言います。

女についてはもっとあからさまに、男に認められることが女の価値だといわれてきました。それに対してフェミニズムは、「男に選ばれようと選ばれまいと、私は私」という思想の装置を提供してきた。「私の価値は私が決める。男に選ばれることによって、私の価値は決まらない」フェミニズムは、そのように女の自己解放のために思想を鍛えてきたわけです。(『バックラッシュ』432頁)

(四) 純潔教育の否定

1949年に文部省は『純潔教育基本要綱』を出し、純潔教育を推進していましたが、1970年ごろから「純潔」という言葉が批判され、性をめぐる価値観が多様化してきました。そして1995年になると、ジェンダー、ジェンダー・フリーの概念が登場してきました。そして1999年、文部省による『学校における性教育の考え方、進め方』が発行され、「性教育」という用語が正式に使用されることになりました。

性教育史の研究者、田代美江子は、性教育の目指す到達点を次のようにまとめています。

- ① 全面的な純潔教育の否定
- ② 科学的な知識に基づく性教育
- ③ 性の問題は人権の問題
- ④ 性の社会的・文化的側面を学ぶ
- ⑤ 関係性を学ぶ
- ⑥ 多様な性のあり方を学ぶ

(木村涼子編『ジェンダー・フリートラブル』203-204頁)

九. 女性解放運動と神の摂理

二十世紀における女性解放運動は、本来、神の摂理に合うものでした。ところが女性解放運動から、女性中心の言語を造ろうとか、男女の性差を攪乱し、性差をなくそうとか、男性の支配から独立しようなどという、過激なフェミニズムが生じてきました。そこで文師は健全な女性運動を推進するために、夫人の韓鶴子女史と共に、1992年に「世界平和女性連合」を創設しました。文師は、次のように語っています。

人類歴史はエバの墮落を女性たちが先頭に立って蕩滅する時代が来ることを撰理的に要求しています。二十世紀における男女平等の思想的風潮、また女性の真の解放を求める運動などは、女性が世界平和のために立ち上がって世界的に大きく活動する環境が造成されたことを意味しているのです。

このような神様の撰理をよく知っている私は、1992年4月に、私の妻と共に「世界平和女性連合」を創設しました。この連合の運動は、近い将来に世界万民が参加する「世界平和女性連合」の運動へと発展させ、真の愛を家庭の中で定着させることによって、理想世界、すなわち地上天国を建設するのです。今、女性の時代は、1990年代の世界的な趨勢であり、女性の愛と協調、和解、調和の精神が、世界平和のために歴史的な貢献を果たす時代であると言えます。（『平和経』1368）

韓鶴子女史は、「世界平和女性連合」が推進する女性運動は、男女が相互に協力して、真の家庭を建設することを、その目的とすると語りました。

これまで私が繰り広げてきた世界女性運動は、男性の権威に対する挑戦や、女性の権利ばかりを強調するフェミニズム運動とは、根本的にその性格を異にしています。今まで西欧社会で発展してきた女性運動は、相克的で衝突的な西洋の闘争精神を反映したフェミニズム運動ですが、私たちの運動は、互いに相応的で相補的な東洋の調和の原理が土台になった、和合の女性運動なのです。男性たちにできないこと、すなわち女性たちだけができることを探し出し、男性たちと相互補完的に協力することによって、真の家庭を建設することをその理想としています。（『平和経』948）

十. 性解放理論の崩壊

マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の土台の上にポスト構造主義が生まれ、その土台の上にポストモダン・フェミニズムが生まれ、その土台の上にクィア理論が生まれました。そしてそれらを背景にして、今日、日本を始めとする性解放理論が展開しているのです。したがってマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の根本土台が崩壊すれば、性解放理論も崩壊する運命にあります。



ポストモダン・フェミニズム、クィア理論、ジェンダーフリー思想が崩壊すれば、純潔にもとづく真の男女の愛、真の夫婦愛を目指すようになります。そこでは男性による女性の支配、差別、虐待はなく、女性による男性に対する反抗もありません。男女が真の愛で共に喜ぶ、男女の真の平等が実現されるのです。そして真の家庭を基盤として理想社会、理想世界が築かれるのです。

III. 真の愛へ導く神の言

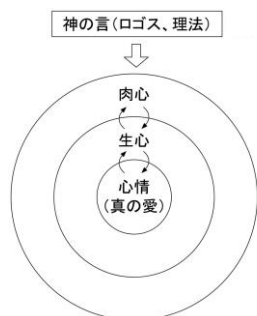
一. 統一思想の規範観

今日、倫理・道徳を破壊する無神論、唯物論の嵐の中で伝統的な宗教や哲学の説く徳目は説得力を失い、その脆弱性を露呈しています。ここに無神論、唯物論を克服しながら、伝統的な宗教や哲学の教えを現代人にも納得できるように説明することのできる理念が必要となります。次にそのような立場から、統一思想に基づいて規範の根拠を提示します。

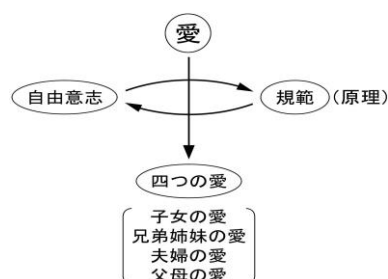
① 神の言は愛の規範

宗教の教えは、フロイトが言うような、人間を抑圧するものではありません。神の戒め、ロゴス、天道と呼ばれるものは、真の愛を実現するための規範です。規範とは、愛が真に愛らしく現れるための愛の標識、道しるべ、愛の道です。すなわち規範は、真なる愛の実現のための、「愛の規範」なのです。

神の言（ロゴス）に従いながら、心情（真の愛）を中心として、生心と肉心が主体、対象の関係で円満な授受作用を行うようになれば、人間は真の人格者になり、真の夫婦となり、真の家庭を築くことができるのです。

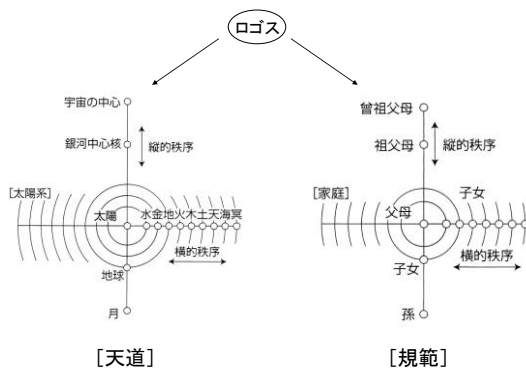


自由意志によって、規範を守るとき、愛が愛らしく、真の愛として実現されるのです。規範を守らない愛は、かえって破壊的な愛となります。



② 宇宙の法則に裏づけられた規範

宇宙の秩序体系は宇宙の法則(天道)によって支えられており、家庭や社会の秩序体系は規範によって支えられています。そして宇宙の法則も、人間の規範も、神の言(ロゴス)から来たものです。従って規範は便宜的につくられたようなものではなく、封建時代の遺物でもなく、余計なものでもありません。天地創造以来、宇宙を導いている自然法則が絶対的であるように、人間の守るべき規範も絶対的なものなのです。



文師によれば、宇宙の法則(天道)は真の愛の道に即したものです。

天道とは何でしょうか？一言で天の伝統です。天に根を置く真の愛の実践の伝統です。天道の人生は、世の中のすべての法を超越した崇高な人生です。したがって、真の愛に革命が必要ないように、天道にも革命が必要ありません。皆様は、ただ真の愛の道、天道に従って「ために生きる」犠牲と奉仕の人生を実践しなければなりません。その道は神様の愛を爆発させる道です。(『ファミリー』 2005. 10. p. 26)

③ 自然は真の愛の教科書

神は人間アダムとエバをモデル(標本)として万物を造られました。アダムとエバの身体をモデルにしたのみならず、アダムとエバによって完成しようとした真の愛をモデルとして、万物を造られました。したがって、われわれは万物を通じて真の愛を学ぶことができるのであり、万物は「愛の教科書」なのです。

統一思想は、ダーウィニズムの弱肉強食の闘争理論ではなくて、愛の吸収理論です。万物は、小さいものは大きいものに吸収されていきます。それはより価値あるもの、より次元の高い愛へと上昇しているのです。そして究極的には、人間の愛の完成に貢献しようとしているのです。これを「愛の吸収理論」と言います。文師は次のように語っています。

「先生はこのような鮭の中に理想的な夫婦のイメージを見ました。なぜ神様は鮭を創ったのでしょうか。それは人間を教育し、人間が従うべき規範を見せるためでした。」(『御旨と海』)

「愛の原理がペアシステムを通して創造された博物館がこの世界なのです。」(『ファミリー』 1992年10月号)

「アダムとエバは、ペアシステムでつくられた愛の自然の園を見ながら教育されつつ成長するようになっていました。」(「真なる愛と統一世界」、『文鮮明師とソ連革命』)

二. 統一思想の性と結婚観

それでは、なぜ今日、このような性倫理の崩壊状態になってしまったのでしょうか。それは、伝統的宗教や哲学において、なぜ離婚はよくないのか、なぜ同性愛はよくないのか、明確にできなかったからです。そこで統一思想の性と結婚観を紹介します。その根拠となるのは、神は一人の男性と一人の女性が合わさった存在であるということです。文師は次

のように語っています。

旧約聖書の創世記第1章27節を見れば、「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された」というみ言があります。この節を帰納的に推理してみれば、神様は、一人の男性と一人の女性を合わせた方である、という結論が出ます。このような神様が、独りでいるのは良くないと思われ、御自身の対象として創造したのが被造世界でした。すなわち、宇宙の万象は形状的な対象の位置に、そしてその中心には、実体的な対象として人間を創造されたのです。このように、神様の実体対象として創造した最初の男性格代表がアダムであり、女性格代表がエバです。神様がこのように一男一女に分立して人間を創造されたことには目的があります。(『天聖教』p.1386)

夫婦は本来、神の姿に似るようになります。したがって統一思想から見た本然の結婚の意義は次のようです。

- ① 神の顕現：夫婦は男性と女性の二性が調和している神の姿に似るようになります。
- ② 宇宙万物の完成：万物は夫婦の愛のかけ橋であり、愛の環境を造ります。したがって愛の主人公である夫婦が完成した時、宇宙万物も完成するのです。
- ③ 人類の統一：夫婦の愛は人類愛に通じるものとなります。
- ④ 家庭の完成：夫婦の愛は家族全体を抱擁するものです。

ところが不倫、離婚などは、そのような結婚の理想を破壊するものです。不倫の愛、愛の分裂のなかには、神は臨在できず、運行できません。また、万物も共鳴できません。聖書には、「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」(ローマ人への手紙 8:22)と書かれています。人間の歪んだ愛の中で万物も苦しんでいるのです。さらには、夫婦の愛がどんどん自己中心的になり、その結果、人類を分裂せしめ、家庭を破壊するものとなっているのです。

本然の結婚観から見れば、不倫や離婚するということは、次のような結果をもたらします。

- ① 神が臨在される夫婦でなく、神様を追い出すこととなります。
- ② 万物も喜ぶことができません。
- ③ 妻(夫)を否定することは全ての女性(全ての男性)を否定することであり、人類社会に亀裂が生じてゆきます。
- ④ 家庭内に不和が生まれ、家庭崩壊にまで至ります。

文師によれば、アダムとエバが神の祝福の下で結婚すれば、神はアダムとエバの形状をまとわれるのであり、アダムとエバは、夫婦として神の宮になります。

神様は、神様と人間が主体と対象として縦的な愛の関係を完成することだけを目標とされたものではありませんでした。縦的な愛を完成して、アダムとエバの横的な愛の結実をもたらそうとされました。その瞬間が、正に内的父母であられる神様が、外的父母であるアダムとエバと完全一体となるために臨在される愛の理想成就の瞬間です。無形の父母であられる神様が、アダムとエバの形状をまとって有形世界に永存する父母になるのです。この時、アダムとエバは真の父母、真の先祖になるのです。(『天聖經』86)

墮落していない本然のアダムとエバは神様の体になり、人間世界の本聖殿になりました。

そして後孫である人類の夫婦も、みな聖殿、すなわち神の宮になったのです。

神様の愛を中心として一つになったならば、人間始祖は神様の体になります。アダムとエバは何者でしょうか。実体をまとった神様の体になるのです。それで、コリント人への第一の手紙に「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」(3.16)とあるのです。私たちの体は神様の聖殿です。(『天聖経』1199-200)

神様はフリーセックスではなく、一男一女主義です。したがって、神の宮となった夫婦には、不倫や離婚はありえないのです。

神様はフリーセックスではなく、絶対、一男一女主義を主張して、永遠不変の配偶を論議する家庭理想が出なければならぬというのが私たちの結論なのです。(第26回「神の日」のみ言) (『ファミリー』1993.4)

では、本然の結婚観から見て同性愛はどのような結果をもたらすのでしょうか。

- ① 神には同性愛はありえないので、同性愛の中に神は運行できません。
- ② 万物もみな、陽陰のペアになっています。したがって、同性愛の中に万物は共鳴できません。
- ③ 男同士、女同士で愛し合えば、人類の分裂になってしまいます。
- ④ 同性愛の夫婦は、健全な夫婦の愛、父母の愛を築くことはできません。また養子を得たとしても、その子は健全な子女の愛を育むことはできず、結局、健全な家庭を築くことはできないのです。

マザー・テレサも同性愛を戒めています。マザー・テレサは1995年に北京で開かれた世界女性会議に宛てて次のようなメッセージを送りました。

男女の素晴らしい違いを否定する人たちは、神が造られたように自分たちを受け入れないため、隣人を愛することができません。……彼らをもたらすものは、対立と不幸と世界平和の破壊でしかありません。

陽陰の調和によって愛と美が生じるのであり、男性と女性は、互いの特性を生かしながら、理想的な愛を育むようになっています。

- 男性的な愛と女性的な愛が調和することによって、美しい夫婦の愛が生まれます。
- 女性らしさは男性が好むものであり、男性らしさは女性が好むものであって、互いに相手のためにあるものです。
- 真の愛を実現するために、心身ともに、男は男性らしく、女は女性らしく造られているのです。

文師も次のように語っています。

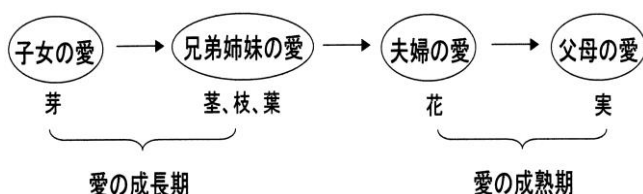
もし自分の物と同じ物に直面するのなら死んだ方がましです。そんな愛は要りません。例えば女性がもう一人のとても柔らかい手に触れたり、男性がとても男らしい手に触れたりするのなら何の味気もありません。柔らかく牛乳のように滑らかで絹のような女性の手は、男性の手に触れられる必要があります。従って男性はがっしりしていなければならないし、女性は柔らかくでなければなりません。神様がそのような調和をつ

くられたのです。（「神の勝利の道」1987.8.20）

三. 純潔による真の家庭

(一) 愛の成長

生命に成長過程があるように、愛にも成長過程があります。



植物は種から成長しますが、木が十分に成長してから花を咲かせて、実を結べば、完熟した立派な実が実ります。同様に、愛の成長において、子女の愛と兄弟姉妹の愛が十分に成長した後、人格を完成した一人の男性と一人の女性が、神と両親の祝福を受けて結婚し、夫婦の愛の花が咲けば、立派な子女が生まれ、健全な子女の愛と父母の愛が育まれます。

ところが植物が成長期の途中で花を咲かせると、花はそのまま散るか、未熟な実しか実りません。同様に、愛の成長期の途中で、男女が交われば、生まれた子供を十分な愛で育てることはできないのです。

本来、子女の愛、兄弟姉妹の愛が十分に育まれてから結婚するようになっています。そうすれば自分の相対者（配偶者）以外の異性を兄弟姉妹として見るようになります。子女の愛、兄弟姉妹の愛には不倫の要素はありません。ところが子女の愛、兄弟姉妹の愛が未熟なままで男女の関係を結べば、相対者以外の異性を兄弟姉妹として見るのではなく、男として、女として見て、不倫やフリーセックスに走りやすくなります。文師も、本来、夫婦の関係は兄弟姉妹の次元で始まるようになってきていると語っています。

アダムの家庭を見ると、アダムとエバは共に同じ神様の息子と娘ですが、エバはアダムの妹の立場で出発しました。アダムはエバの兄の立場でした。しかし、彼らは成長して夫婦になったのです。同じように、夫婦間の関係は一つの血を分けた兄弟姉妹の次元で始まらなければならないのです。（『平和経』1542）

そして文師は、夫婦の愛は花に相当すると語っています

男性と女性が祝福を受けて完全な愛を分かち合い、喜びを享受するとき、神様の目には、地上に咲いた花のようだということです。また彼らの愛によって成されるすべての調和万象は、神様には香水のようなものです。神様は、このような美しい香りの中で暮らしたくて訪ねてこられるということです。（『祝福家庭』2003年夏季号、77頁）

(二) 真の愛と偽りの愛

情熱的に一瞬のうちに燃えさかる愛は、やがて情熱の炎が消えて小さくしぼんでゆきます。男女が互いに条件の良い相手を求めて競い合っている巷の愛は、自己中心的な奪い合いの愛です。家庭を破壊する不倫の愛は、屈折した、よこしまな愛です。これらはみな偽りの愛です。すべての男女の愛が、このような偽りの愛一色であるわけではありませんが、いかに美しく見える男女の愛の中にも、必ずこのような偽りの愛の要素が内在しているのです。

男女の愛の中に、願わない偽りの愛が潜んでいることを追求した代表的な思想家はキル

ケゴールです。彼は次のように言います。

「自然的な愛〔恋愛〕は自身の内部に毒素を持っています（それは利己の愛の毒素で
あります）。それは必ず醜態をひき起こし、その醜態の中に陥ち入らざるをえません」
（『愛について』）

日本の代表的な作家、夏目漱石も、男女の愛の中に潜む黒い影を追求していました。

「[男女の愛の奥底には] 結核性の恐ろしいものが潜んでいる」（『門』）

「恋は罪悪ですよ。そうして神聖なものですよ」、「私の後には何時でも黒い影がくっ
ついていました」（『こころ』）

人間は誰しも真の愛を求めています、願わない偽りの愛によって動かされています。
それは次のような事実から知ることができます。

① 誰しも永遠なる愛を誓って結婚します。
結婚式では、「末永く」、「とわに」、「死が二人を分つまでは」と、永遠なる愛を誓います。
期限を区切って結婚するような結婚式はありません。しかし、現実には、やがて愛が冷え
切って、離婚する場合があります。

② 夫婦の愛は一对一
互いに「あなただけを愛します」と誓って、真の愛は成立します。不倫や三角関係になれ
ば、愛は壊れてしまいます。文師も次のように語っています。

愛のパートナーは1対1

愛は絶対的であることを願うというのです。絶対というのは一つです。二つではあり
ません。絶対的だというのは永遠に一つだという意味です。愛のパートナーは、一人
の男性と一人の女性だけを許容するというのです。それゆえに、神様がアダムとエバ
を一人ずつ造られたのです。（『宇宙の根本』）

夫婦の愛は分けられない

人間は本性的に自らの相対の、自分に対する愛が分けられることを願いません。夫婦
間の横的な愛の関係は、父母と子供のための縦的な愛の関係と異なり、分けられればも
はやその完全性が破壊されます。これは夫婦間で絶対的な愛の一体を成すようになって
いる創造原理ゆえです。人は絶対に自分の相対のために生きるべき愛の責任性があ
ります。（『祝福家庭と理想天国 I』 p. 31）

アダムとエバは、一人と一人

エデンの園において、絶対の男性は一人しかいなかったのであり、絶対の女性も一人
しかいなかったのです。なぜ、そうなのでしょう？ 愛は二つではありません。絶対
的です。絶対に一つなのです。女性の愛も、男性の愛も、絶対に一つです。二つでは
ありません。一つです。（『ファミリー』 2002. 11. 36）

心の中にいるのは永遠に一人

誠実で美しく、香りが漂う、花のような女性の心の中には、男性が二人いるのではあ
りません。絶対的に一人であり、それから唯一的に一人であり、変わらず不変的に一
人であり、永遠的に一人であることを願うのです。[同様に、男性の心の中にいるのも

永遠に一人の女性です]。(『ファミリー』2002. 11. 36)

③父母の離婚を願う子女はいない。

子どもは一人の父、一人の母が永遠に愛し合うことを願っています。親が離婚再婚を繰り返せば、生みの親以外に、義理の親が複数できます。子どもは、そのようなことを願いません。しかし現実はそのような場合が多くなってきています。文師も次のように語っています。

母親が二人、父親が二人いれば、よいと思う人はいない

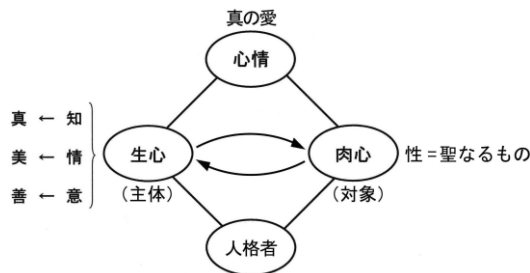
皆さん。“母親が二人いれば、よい”と思う人はいますか？ 一度に二人の母親のおなかに入って行って、生まれることができますか？ ありえないというのです。“父親が二人いれば、よい”と思う人はいますか？ 二つの種をもらって、必要な娘なら娘を生むことができますか？ 父親の精子も絶対的であり、母親の卵子も絶対的なのです。唯一的であり、不変的であり、永遠であるというのです。これさえ知れば、今日の世の中が、どれほど悪い世の中になったのか、自動的に結論が出てくるのです。(『ファミリー』2004. 1. 38)

(三) 絶対的な性

性についても同様に、真なる性と不倫の性があります。不倫の性とは、自己中心的な性です。それは自分の意のままに、欲望のおもむくままに、性行為を行うことであり、フリーセックスにほかなりません。自分の妻以外の女性と関係する性、自分の夫以外の男性と関係する性も、不倫の性です。それらはみな偽りの愛と結びついたものであり、家庭を破壊するものです。

それにたいして真の性は相対のための性です。すなわち夫の性は妻のためのものであり、妻の性は夫のためのものです。それは夫と妻が互いに貞節を守る性であり、それを「絶対的な性」と言います。そのような絶対的な性にもとづいて、真なる夫婦の愛が成立するのです。

フロイトは、性的エネルギーの宿るイドは悪しき衝動であって、エゴで抑圧しなくてはならないと説きました。しかし統一思想から見れば、性は本来、悪しき衝動ではありません。真の愛を中心として、生心と肉心が主体と対象の関係で、円満な授受作用を行うとき、性は聖なるものとなるのです。



○「真の愛を中心とすれば、体(肉心)は心(生心)に共鳴する」

○「性は聖なるものである」

絶対「性」について文師は次のように語っています。

神様が人間始祖のアダムとエバを創造して与えてくださった、唯一の戒めは何だったのでしょうか。天が許諾する時までは、お互いの「性」を絶対的基準で守りなさいという戒めであり、祝福でした。善悪の実を取って食べれば必ず死に、取って食べずに天の戒めを守れば、人格完成はもちろん、創造主であられる神様と同等な共同創造主の隊列に立つようになり、さらには万物を主管し、永遠で理想的な幸福を謳歌する宇宙の主人になるという聖書のみ言は、正にこの点を踏まえて語ったことです。

婚前純潔を守り、真の子女として天の祝福のもとで結婚して真の夫婦となり、真の子女を生んで真の父母になりなさいという祝福だったのです。これは、神様の創造原則である絶対「性」を離れてなされるものではないという事実を、確認させてくれる内容です。すなわち、神様のこの戒めの中には、人間が歴史を通して神様の子女として個性を完成し、万物の主管主の位置に立つためには、神様の創造理想である絶対「性」のモデルを相続しなければならないという、深い意味が隠されていたのです。(『天聖教』 p. 1392)

墮落した世界においては、男性も女性も自分の愛の器官を自分の意のままに用いる場合が多いのですが、真の夫婦の愛は、一対一で成立するようになっているために、神は、夫婦の愛の器官の主人をそれぞれの相対になされたというのです。文師によれば、

神様は知恵の大王であられるために、男性と女性の愛の器官をそれぞれ取り替えてくださったのです。男性のものだといっても、その主人は男性ではありません。女性の場合も同じです。主人を差し置いて自分の思いのままに行動した人は、愛に背いたことに対する審判を受けなければならないのです。(『天国を開く門・真の家庭』 p. 95)

パウロも同様なことを語っています。

妻は自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは夫である。夫も同様に自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは妻である。(コリント I 7:4~11)

人間の愛の器官である生殖器は真の愛が成立するための基盤となっています。文師によれば、生殖器は「生命の王宮、愛の王宮、血統の王宮」であります。

人間の生殖器は、限りなく神聖な所です。生命の種を植える生命の王宮であり、愛の花を咲かせる愛の王宮であり、血統の実を結ぶ血統の王宮です。この絶対生殖器を中心として、絶対血統、絶対愛、絶対生命が創出されます。絶対和合、絶対統一、絶対解放、絶対安息が展開するのです。(『天聖教』 p. 1400)

したがって絶対「性」は、神が人間に賦与された最高の祝福なのです。

絶対「性」は、天が人間に賦与された最高祝福です。絶対「性」の基準を固守しなければ、人格完成、すなわち完成人間の道を行くことが不可能だからです。さらには、神様も人格神、実体神の位置を立てるためには、完成した人間を通して真の家庭的絶対「性」の基盤を確保しなければならないからです。絶対者であられる神様が、私たちの人生を直接主管され、私たちと同居し、共に楽しまれるためには、御自身の対象であり、子女として創造した人間が、神様のように絶対「性」の基準で完成した家庭

の姿を備えなければならないという意味です。（『天聖教』 p.1392-93）

絶対性による真の愛の実現について、次のようにまとめることができます。

- 愛は絶対、唯一、不変、永遠であることを願います。
- 一人の男性と一人の女性が、神の縦的な愛を中心として愛し合うとき、真の愛は実現されます。
- 夫の生殖器の主人は妻であり、妻の生殖器の主人は夫です。
- 生殖器は神様の縦的な愛につながる神聖な本宮です。
- 絶対夫婦における絶対性によって絶対愛（真の愛）が実現されます。

（四） 真の家庭運動

崩れゆく家庭、社会を立て直し、神の願われる創造理想世界を実現するためには、何よりも、真の家庭を築かなくてはなりません。そのためには、①真の愛による祝福結婚を推進し、②性解放に通じる唯物思想（マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義）を克服しなくてはなりません

文師によれば、フリーセックス、性解放、同性愛は悪魔の計略にはかなりません。

家庭において厳格でなければなりません。何かの制裁をしても、サタン世界に染まらないように父母たちが責任をもち、管理し、教育しなければいけない時代です。フリーセックス、性解放、同性愛、これは悪魔の計略です。ここから 180 度異なる方向に戻らなければならないので、天の国は、この正反対の道を行くのです。（『天聖教』第五編 p. 568-69）

今こそ、絶対「性」の教育革命がなされなければなりません。文師は宣言しました。

神様を縦的な絶対軸として、絶対「性」の価値を全人類に天の憲法として教育する教育革命を完遂しなければなりません。この道だけが人類に善の真の血統を伝授してあげることができ、神様の真の家庭理想完成を成す道だからです。純潔、純血、純愛が今後真なる人類の教育理念となることでしょう。（「真の平和世界と真の父母UN世界の安着」（平和メッセージ17）

貴賓の皆様！このような深刻で貴い時代を迎えて、皆様の人生にもこれから革命的で宇宙的な変化が訪れるでしょう。そのような意味において、天が下さるきょうのメッセージをもう一度要約してみようと思います。第一に、全祝福家庭は、まず家庭の中で神様を中心にお迎えし、父母と子女が完全に一つになる訓読教育を毎日実践しなければなりません。原理教育、真の父母様が下さった教材、教本の教育、真の父母様の自叙伝の教育、そして原理本体論の絶対「性」の教育を徹底的に行うべきだということです。（『天聖教』 p.1450）